現代児童文学作家対談

5

那須正幹
舟崎克彦
三田村信行

インタビューア 神宮輝夫

現代児童文学作家対談 5

那須正幹
舟崎克彦
三田村信行

インタビューア 神宮輝夫

江苏工业学院图书馆
藏书 章

神宮輝夫
一九三二年生まれ。英米児童文学を広く紹介、翻訳・評論に活躍している。『アーサー・ランサム全集』『ウォーターシップ・ダウンのうさぎたち』ほか、J・R・タウンゼンドの作品など多くの訳書がある。

現代児童文学作家対談 5

発行　一九八九年十月　初版一刷
著者　神宮輝夫
発行者　今村　廣
発行所　株式会社 偕成社
〒162 東京都新宿区市ヶ谷砂土原町三―五
振替・東京五―一三五二番
本文印刷　新興印刷製本株式会社
多色印刷　小宮山印刷株式会社
製本　文勇堂製本工業株式会社

N.D.C933 273P 19cm ISBN4-03-020050-8
Published by KAISEI-SHA, Ichigaya Tokyo 162. Printed in Japan.
©Teruo Jingu 1989 落丁・乱丁本はおとりかえします。
★偕成社は、平日も休日も24時間、電話でもFAXでも本のご注文をお受けしています。どうぞご利用ください。電話(〇三)二六〇-三二二一(代)FAX(〇三)二六七-〇一二四
◉本書の一部または全部を無断で転載したり複写複製(コピー)することは、著作者および出版社の権利の侵害になることもありますので、あらかじめ小社あて許諾をお求めください。

対談のはじまり

神宮輝夫

◆

私が、日本の児童文学作家たちから、作品や子どもの文学全般について話がききたいと考えた直接のきっかけは、イギリスやアメリカの作家・作品論の本を翻訳しはじめたことでした。翻訳しているうちに、現代のすぐれた作品すら、すでに子どもの前から姿を消しているという事実に気づいたのです。おなじ現象が日本の作家たちの作品についてもおこっています。しかし、よい作品は、不断にその存在を知らせつづけなくてはならないと、私は考えています。この対談もその一つの試みです。

第二次世界大戦後、新しい子どもの文学作品が年を追うごとに数多く世に出ましたが、作家・作品研究はまだ少ないと思います。この分野でもイギリスは日本よりすこし進んでいて、読書欲を強くそそる作家論がいくつかあります。子どもと大人共通の財産でもあるすぐれた児童文学作品の魅力を伝えてくれる研究がつぎつぎ生まれてほしいものです。対談も、そうした研究にさまざまのヒ

ントを提供できる方法ではないかと思いました。

もっとも、対談者としては、私はもっとも不向きな人間かも知れません。ほとんどの作家と、作品を通じて以外おつきあいがないからです。そして、対談法もとくに勉強したことがありません。そこで、私は、話題を作品に限ること、自分が読んで受けとったものをもとにして話をきくこと、引例なども自分の守備範囲にかぎることを自分の方法としました。目的は、対談する作家の作品世界の魅力を出来るだけ浮き彫りにすることですが、素朴な方法のために、豊かな鉱脈をそのまま残している場合も多いと思います。しかし、幸いなことに、今までに話しあったほとんどの作家たちは、私のいうことを承服できなくても、すぐに反論したりせず、一度かんがえてから答えてくれました。自作を客観的に見るゆとりのある人たちばかりだったので、無用な議論になったり、対話の流れがとぎれてしまったりしませんでした。そのぶんだけは、豊かなものがあると思っています。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

5

現代児童文学作家対談

■

目次

1 対談のはじまり……神宮輝夫

■

9 那須正幹
〈ズッコケ〉は、ぼくの理想像

54 注

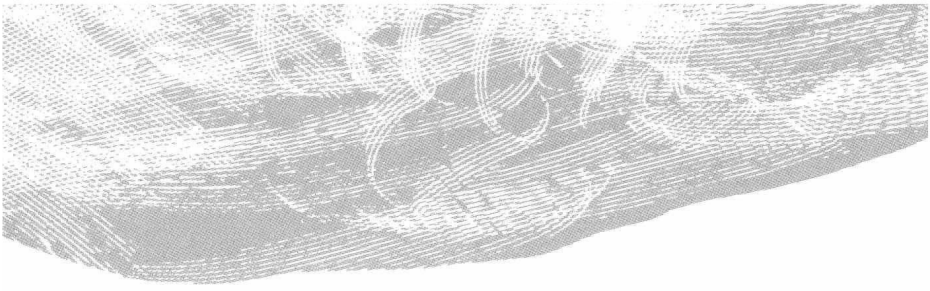
60 那須正幹年譜

67 那須正幹著作目録

74 那須正幹研究文献目録

81 舟崎克彦
ぼくはカメラワークで書くんです

150 注



160 舟崎克彦年譜

168 舟崎克彦著作目録

184 舟崎克彦研究文献目録

193 三田村信行

絶えざる異議申し立て。それが出発です

251 注

257 三田村信行年譜

262 三田村信行著作目録

268 三田村信行研究文献目録

■

272 対談を終えて……神宮輝夫

装画◈司修
造本・図書設計◈工藤強勝
編集協力◈恒人社

現代児童文学作家対談

5

インタビューア 神宮輝夫

■ 那須正幹
舟崎克彦
三田村信行

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

那須正幹

〈スッコケ〉は、ぼくの理想像

写真８頁◆那須正幹氏。1988.11.3（提供・恒人社）

写真20～21頁◆自宅にて。黒船の模型は手づくり。船名〝サスケハナ〟。1988.11.3
（提供・恒人社）

写真42～43頁◆瀬戸内海野島沖でイシモチを釣りあげる。1988.11.3（提供・恒人社）

◆

初期作品のこと

神宮――『首なし地ぞうの宝』（学習研究社）は出版されたのが一九七二年ですね。そうすると、処女出版から十七年くらい。

那須――ぼくは一九六八年に広島の「子どもの家」[1]という同人誌に入ったんです。そのとき児童文学なるものをはじめて知ったんですよ。

神宮――入った動機はなんでした。

那須――うちの姉の竹田まゆみ[2]が、一九六八年の秋だったか、「子どもの家」に入った。姉は国文学の出身ですから、文学少女のなれのはてみたいな人で、昔から文学に興味があって、たまたま広島にあった「子どもの家」に入ったのです。山口勇子[3]さんたちがやっていた会です。おもしろい会で、女の人ばっかりなんですよね。そこに本を出している人がいるという。ぼくも作家というのは見たことがなかった、それで入ろうかといって入ったのがそもそもの児童文学をやる動機です。

神宮――ぜひ子どもの文学が書きたいというような、強烈な動機はなかったわけ？

那須――ないです。児童文学という言葉も知らなかったね。

神宮――そのころは、失礼ですけど、なにをやっていらしたのですか。

那須――島根農科大学（現島根大学農学部）で森林学を勉強していたんです。学校を卒業して二年ほど東京で自動車のセールスをやりまして、上司とけんかして広島に帰っておったんです。広島でおやじが書道塾をやっていたものですから、その手伝いをしていたのです。一種の脱サラというのかな。ぼくは字がへたくそだから、このままおやじのあとはつげないし、なにかせんといけんなというのはあったんですけどね。よもや児童文学とは思ってもいなかった。

神宮――広島の「子どもの家」というのは、いわばリアリズム[4]が中心の同人誌でしょう。

那須――そうでもないでしたけどね。山口勇子さんなんかは、あまり作品のことは言わない人ですから。なにをやってもよかったから。ぼくは員数外みたいな感じで、竹田さんの弟さんという感じだったんです。二十六歳だったのかな、若い男の子が入ってきたわいという感じだったと思います。

神宮――はじめから、わりあいと物語性の強いものを書いたんでしょう。

那須――そうですね。

神宮――日本の子どもの本は、物語をわりあいとだいじにしない傾向が、いまでもずっとあるんですよね。そして、物語のひとつの性質には、パターンというのがあると思うんですよね。悪い意味でいえば類型という言葉があてはまるけれども、そうじゃなくて、やはり形式という、しっかりしたのがあるでしょう。

『首なし地ぞうの宝』なんかをみますと、たとえば男の子が三人いると、三人それぞれがちがった性格を持っている。それが、そのまま〈ズッコケ・シリーズ〉の三人とつながっていると思う。だから、はじめから那須さんの作品には昔話の主人公の、よいおじいさん、よいおばあさんといった明瞭（めいりょう）な性格を持っている子どもが出てくるパターンがあるんですよね。そういう物語というのをはじめから書いたわけは、なにかありましたか。

那須――ぼくは子どものとき、本はまったく読まなかったんです。漫画が好きだったんです。手塚治虫[5]の漫画なんかをよく読んで、あとは例の「怪人二十面相[6]」とか、そういう読み物は少しは読んでいました。中学校のときからは昆虫採集が好きだったから、そっちのほうばっかりやっていましたからね。ただ、映画はよく見たね。だから映画の形式というのは、無意識のうちにつかんでいますね。高校、大学、あのころは映画

と「S－Fマガジン」[7]、早川書房から出していた「エラリイ・クイーンズ・ミステリ・マガジン」[8]とか、ああいうものはたくさん読んでいました。

いわゆる文学とか、読み物を読んで育ったのではないんです。ですから、書くといったらやっぱりそっちになりますよね。それと、マーケット・リサーチしてみると、どうもあのへんが穴場じゃないかなというのを思ったですから。

神宮――意識的にねらった？

那須――『首なし地ぞうの宝』を書くときは、完全にそれですね。あの当時は疎開(そかい)ものが多かったですからね。戦争ものは当分はしょうがないと思っておったから。当時の児童書に、ああいう推理めいた作品はまったくなかったですからね。ここは穴場じゃないかと。

神宮――なるほど。作品の系列を見てみると、やはり物語作者ね。

那須――そうでしょうね。ただ、ストーリーテラーだといわれるけど、そんなに意識はしていないんだ。どっちかというとキャラクターをつくるとか、ああいうほうが一生懸命になるんです。ストーリーなんていうのは、考えればすぐ浮かぶことだからね。

神宮――そんなにすぐ浮かぶものかな。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com